

銀幕の思い出
 「平気だよ。ぼく『ゾンビ』だつて見るんだもの」
 祖父にテレビで見た映画の話をする。
 「神様の作った化け物は怖いね。人間は到底、及ばない」
 「神様？ ウイルスでなるんだよ」
 ぼくは首を傾げた。
 「ウイルスは自然のものだろう。だから神様だよ」

3

ぼくは祖父の言うことをすべて理解していたわけでは
 ない。祖父も期待してはいないようだった。
 餅の浮かんだ蕎麦が置かれ、ぼくは夢中で平らげる。祖
 父はいつもつまみを頼むだけだった。それにも、ほとんど
 手を付けず、煙草に火を点ける。

一本の煙草を大事そうに喫む祖父の姿が今も目に浮かん
 だ。

銀幕の思い出
 昼間、講釈を垂れていたにも拘らず、ぼくは寢床で震え
 ていた。映画のセットや滑稽とさえ考えていたせむし男の
 姿に怖気を振っていたのである。

4

障子越しに声をかけると祖父は眠たげに迎えてくれた。
 ぼくは、祖父の布団から染みの浮いた天井を眺める。半
 世紀前に建てられた家は、存外に広かった。

銀幕の思い出
 暮前へ煙草を供えるために封を切り、一本啜えて火を点
 ける。家族の中で煙草を喫うのは、ぼくだけだ。

銀幕の思い出
 「お腹、空いたでしょ？ 精進落とし食べに行こう」
 母に声をかけられる。
 「もうちよつとだけ」
 考えてもいなかった言葉が口から滑り出していた。葬儀
 は済み、もうすべきことは何もない。

5

本堂に戻って行く母の背中を見送り、ぼくは一人になっ
 た。喪服の隠しから煙草の箱を取り出す。煙を吸い込んで
 空を仰いだ。

雲ひとつない。しかし、これでは駄目なんだ。ぼくは真
 新しい死体を漁るせむしの助手よろしく、墓の周りをぐる
 ぐる回る。

暗黒の雲が太陽を覆っていないならなかった。

銀幕の思い出
 ぼくは天へ腕を掲げる。
 「この屍に力を与え、甦らせたまえ！」
 博士の台詞はこんなふうだったと思う。ぼくの脇に助手
 が現れ、手術台に死体が載せられた。この冒険に耐え切れ
 ず、太陽は雲に隠れ、稲光が空を劈く。
 「生きてる、生きてる！」
 だが、博士ならざる身に奇跡を起こす力はなかった。(了)
 ※百四十字を上限にしたパラグラフを九編作成し、ひとつ
 の章編として構成しています。

9

銀幕の思い出
 「先生。今日は『フランクエンタイン』でございますよ。
 坊ちゃんには少々、恐ろしい話かもしれません」
 隣近所の人々から祖父は『先生』と呼ばれていた。それ
 は彼が郷土史家であり、高校の教師を長年、勤めていた
 めである。
 「……そうですか」
 小屋の主人の言葉に祖父は迷っているふうであった。
 映画の帰りは蕎麦屋に入る。そう決まっていた。

銀幕の思い出
 祖父は一風変わった人物だった。煙草の銘柄、衣服の型
 や色、起床就寝の時間まで決まっている。その伝で土曜は
 映画館へ出かけたものだ。誘われたぼくは、喜び勇んで後

銀幕の思い出
 リールが巡り、白い幕に影が映し出される。忙しなく瞬
 く影は、やがて収束し、ひとつの像を結んだ。
 モノクロームの画面はフイルムの傷が目立ち、俳優の動
 きも滑らかではない。字幕は七五調だ。
 映写技師さえ居眠りし、客の抗議の音がぼくを自覚めさ
 せる。思えば、不真面目極る映画鑑賞であった。

(c) 2014-2015 F-ナツ



銀幕の思い出

フランクエンタイン博士、奮闘すの巻



題名 銀幕の思い出
 フランクエンタイン博士、奮闘す
 作者 F-ナツ
 発行日 2014年4月29日
 2015年3月11日改
 連絡先 twitter: @donut_no_ana
 tumblr: http://donut-stumblr.com/
 使用画像: ヒューマンペクトグラム2.0
 http://pictogram2.com/